「桶狭間合戦」における両軍の進軍ルートの検証と勝敗の要因

[はじめに]

中世と近世の過渡期である戦国時代は、日本歴史の前半と後半の分岐点であり、現代につながる日本社会への転換期と言われている。

地方に分立する戦国大名間では、領土めぐる対立・紛争を戦いによって解決することが常套手段となっていた時代である。(もちろん調略や同盟による戦いを回避する外交戦術も駆使ははされている。)

その中で、天下統一を主導した人物が織田信長である。信長は近隣大名を切り倒し覇権を打ち立てていく過程で、歴史に残るいくつもの大合戦を制して来たが、ここで取り上げる桶狭間の合戦は、その覇権樹立の為の合戦の中でまさに登竜門的合戦であった。

勝った信長はその後彼の政治力・軍事采配への天分の発揮があったとはいえ、すばらしい出足で天下統一へ突き進んでいった。一方駿河・遠江・三河と尾張の一部を制していた戦国大大名今川家は、次代の氏眞の能力もあったが、この敗退を契機に衰退し、滅んでいった。

その意味において、本合戦の歴史的意義は極めて重要と考える。

本合戦は永禄三年五月(新暦一五六〇年六月)、桶狭間(愛知県名古屋市・豊明市)において織田信長と今川義元が戦い、軍勢劣勢(約十分の一と言われる)の信長が完勝し、義元は大軍の将にはめずらしく戦場において討ち取られた。

本合戦は歴史的な重要な合戦との位置付けと共に、寡が多に完勝した戦いである事から、江戸時代から今日まで歴史家・軍事研究家によって決戦当日を中心に戦いの模様や信長勝因について、記述され、研究されてきた。

これまで永く、「信長が桶狭間を迂回して、義元本陣へ奇襲し、成功をおさめた。」との説が通説であったが、この説は、小瀬甫庵著「信長記」を基本史料して、その他二流史料を基にした結論であるとして、近年になって、これを否定し、太田牛一著「信長公記」を基本史料として「信長正面突破説」(藤本正行提唱))が今日有力な説と言われているが、その外にも新説が発表されている。

ここで織田・今川両軍の進軍ルートと布陣を史料等によって検証し、信長勝因、義元敗因を論述する。

結論としては、信長勝因の最も大きな要因は暴風雨に助けられ、又は利用したことであるが、桶狭間で攻撃ルートが適当であったことである。

桶狭間の北側山際より進撃し義元本陣へ真っ直ぐ突き進んだ事である。

一方、義元軍の敗因と言うよりも、大軍の大将が戦場で討ち取られる大敗退の主要因は、桶狭間の北側の低い山並を制圧しておかなかったこと、少なくとも桶狭間の西側入り口の北側の山（丘）部分だけでも制圧しておかなかった事であると考える。

史料としては、太田牛一著「信長公記」を一級史料と位置付け、従来の通説の中心的史料である小瀬甫庵著「信長記」、そして義元陣営から見た本合戦の史料大久保彦左衛門忠教著「三河物語」を基本史料とし、さらに適宜その他史料を引用して論述する。

一、今川義元軍の進軍ルート

（1）永禄三年五月十七日（新暦一五六〇年六月二十日）

（A）信長公記（町田家本翻刻、桑田忠親校注、新人物往来社）
（以後公記と略す）

天文廿一年壬子五月十七日、
一、今川義元沓懸へ参陣。

（B）信長記（「豊明市史　資料編補二　桶狭間の戦い」記載史料　名古屋市蓬左文庫所蔵の小瀬甫庵作の信長記の翻刻）
（以後甫庵と略す）

義元四万五千騎ノ軍兵引率〆永禄三年五月十七日、愛知郡沓懸ニ着テ。

（C）三河物語（「豊明市史　史料編補二　桶狭間の戦い」記載史料　日本思想体系二十二　岩波書店）
（以後三河と略す）

明ケレバ、義元地鯉鮒に付［着］給ふ。

①「公記」の天文廿一年との記載は記述時の作者の勘違いか、後の加筆時・転記時の誤りで、正しくは永禄三年が正しい。

②「三河」では、沓懸（城）に到着したとの記述はないが、「公記」・「甫庵」その外に松平記、総見記においても沓懸（城）着陣の記述がある。
到着日は「公記」と「甫庵」が五月十七日に対し、織田軍記では、十七日池鯉鮒、十八日沓掛へ発向となっている。

③義元軍の兵力については、その後の研究者により、二万五千から三万位かと言われている（信長軍は二千五百から三千位）

（2）永禄三年五月十八日（新暦六月二十一日）

（A）公記

十八日夜に入り、大高の城へ兵粮入れ、

（B）甫庵

翌日十八日ノ夜にニ入、大高城兵糧ヲ入、

（C）三河

（十八日についての具体的な記述なし）

①十八日夜に大高城へ兵糧を入れることに成功した。松平記によるとこの仕事は、松平元康（家康）となっている。

②「三河」では、十九日に兵糧を入れたことになっている。

（3）永禄三年五月十九日（新暦六月二十二日）

（A）公記

辰の剋に源太夫殿宮のまへより東を御覧じ候へば、鷲津・丸根落去と覚しくて煙上り候。

鷲津・丸根攻め落し、満足これに過ぐべからず由にて、謡をを三番うたはせられたる由候。今度家康は朱武者にて先懸をさせられ、大高へ兵粮入、鷲津・丸根にて手を砕き、御辛労されたるに依って、人馬の息を休め、大高に居陣なり。

（B）補庵

爰ニ於イテ軍評定シケルカ、翌朝ハ鷲津・丸根両城ヲ可攻干ニソ定メケル。

・・・・・・今朝ハ鷲津・丸根両城即時ニ乗取今又多クノ敵ヲ討捕事、

兎ニモ角ニモ我鑓先ニハ、・・・・・・・・・・

（C）三河

永禄三年庚申五月十九日に、善元ハ池鯉鮒より段々に押て大高え行、棒山之取手ヲツクヅクト巡見シテ、諸大名ヲ寄て、良々敷評定ヲシテ、「サラバ責取。ソノ儀ナラバ元康責給え」ト有ケレバ、元ヨリ躋殿ナレバ、即押寄テ責給ひケレバ、程無タマラズシテ、作［佐久］間ハ切て出ケルガ、雲［運］モ尽キズヤ、打モラサレて落て行く。家の子郎従［党］共ヲバ悉く打取。

① 信長が大高城を囲む為に築いた付城鷲津・丸根両砦を義元軍が早朝に攻撃し、攻め落とした。

② 「公記」によると信長は辰の刻（午前８時頃）に熱田神宮において、東の方角に煙が上がるのを見て、両砦の落去を確認した。

③ 「甫庵」によっても、義元の下に両砦の乗っ取りの報告の記述がある。

④ 「三河」では義元は大高へ行き、棒山砦をしっかりと巡見して、両砦を攻撃したの記述がある。
棒山は鷲津・丸根両砦のある場所のことである。「大高え行」の大高は大高城ではないと思われる。当時この地方の名称が確定していなかった中で、作者がどの当たりを言っているのか具体的には不明であるが、桶狭間の南の丘陵のある地点と思われる。（現在地名で、同丘陵に大高の地名あり）

⑤ 両砦の攻撃の大将は「公記」、「三河」によると家康である。

（4）永禄三年五月十九日義元本隊の進軍

（A）公記

御敵今川義元は、四万五千引率し、おけはざま山に、人馬の息を休めこれあり。
天文廿一年（注　永禄三年の誤り）壬子五月十九日、午の剋、戌亥に向つて人数を備へ、

（B）甫庵

今朝義元知多郡マテ出張ノ由飛脚到来ノ条明日逆寄ニ押寄合戦スヘシト思フハ如何ニト有ケレハ、

（C）三河

二郎三郎様ヲ置奉リテ、引退ク処ニ、信長は思い之儘に懸付給ふ

① 桶狭間の戦いの決戦場となった義元本陣位置は「公記」によると、おけはざま山と明記しているが、「甫庵」、「三河」では地名の記載がない。「甫庵」では知多郡であることしか読みとれない。

② 濃尾平野の一画であるこの地区名称は、当時固有名詞として又行政名として確定しておらず、桶狭間の名称も漠とした広がりをもった普通名詞として使用されていたと考えられる。（義元桶狭間での本陣については、更に後述する）

③ 沓掛城本陣出発は、一九日であり、「公記」によると、午の刻（正午）にはおけはざま山で陣を布いたとある。沓掛城と桶狭間は直線で三～四キロメートル位とするならば、義元は沓掛城で鷲津。丸根両城を攻め落としたとの報告を聞いてから、沓掛城を出発したと考える。従って、先陣は早朝に桶狭間方面に向け出発していた。

二、織田信長軍の進軍ルートと主戦場

永禄三年五月一九日（新暦六月二二日）

（1）清洲城より熱田

（A）公記

案の如く、夜明けがたに、佐久間大学・織田玄蕃かたよりはや鷲津山・丸根山へ人数取りかけ候由、追々御注進これあり。此の時・・・・・・・・・・・・・・・、たちながら御食を参り、御甲をめし候て、御出陣なさる。其の時のお伴には御小姓衆、・・・・・・・・・・・、是等六騎、あつたまで、三里一時にかけさせられ、辰の剋に源太夫殿宮のまへより、東を御覧じ候へば、鷲津・丸根落去と覚しくて、煙り上がり候。此の時、馬上六騎、雑兵弐百計りなり。

（B）甫庵

サラハ明日ハ未明ニ可打立ト仰ラレテ立せ給フ。翌日払暁ニ佐久間大学・飯尾近江守方ヨリ、敵鷲津・丸根へ早取懸候由飛脚到来セシカハ物ノ具シ給ヒツゝ栗毛ナル馬ノ太逞キニ金覆輪ノ鞍シカせ、ヒラリト打乗清洲ノ城ヲ出サせ給フ時ニハ、・・・・・・・・・・・・・・・・・・・、唯一〇騎計ニテ先熱田へト

急せ給ヒケルカ、熱田ノ旗屋口ニテハ早雑兵一千余騎方々ヨリ馳加リケル。

（C）三河

其内に、信長は清須より人数ヲクリ出シ給ふ。

①「公記」・「甫庵」の記述によると、信長は鷲津・丸根両砦が一九日朝攻撃されるとの情報を前日に得ていた。しかしながら直ぐに援軍を送ることをせず、又撤収命令も出さなかった。

②一九日朝実際に攻撃を受けてからの清洲城を出陣である。そして「公記」によると熱田神宮で辰の剋（午前八時頃）東方にに煙が上がるのを見て両砦が落ちたことを確認した。（熱田神宮よりは実際には東南にあたる。）

③信長は作戦上両砦をどのような役割で使おうとしたのか。

○　玉砕を覚悟に戦わせ、敵を出来る限り、消耗させる

○　一九日朝助けに行って両砦を守る。

○　戦って、しかるべき時期に撤収させる。

右記の内「助けに行って両砦を守る」意志はなかったと考えられる。一九日朝に攻撃の報告を受けてからの出陣では、援軍は間に合わないことは想定出来るはずである。

それは、義元軍が中島当たりに朝から布陣することは想定出来るし、中島から両砦へ海岸の道は潮のの加減でで使えないことも承知のはずであるからである。

（2）熱田より善照寺

（A）公記

浜手より御出候へば、程近く候へども、塩満ちさし入り、御馬の通ひ是れなく、熱田よりかみ道を、もみにもんで懸けさせられ、先ず、たんげの御取手へ御出て候て、夫れより善照寺、佐久間居陣の取手へ御出であつて、御人数立てられ、勢衆揃へさせられ、様体御覧じ、・・・・・・・・

（B）甫庵

・　・・・・浜ノ手ハ折節塩満テ馬ノカヨヒモナカリケレハ笠寺ノ東ナル細

・　道ヲ経テ取手々々勢ヲモ相具シ善照寺ノ東、山ノ夾ニテ勢ヲ揃ケルニ、

・　漸々三千計ニ見ユルヲ。

（C）三河

信長は清須より人数ヲクリ出シ給ふ。

① 善照寺砦は、本合戦以前に、大高城と同様に今川によって奪取された鳴海城の織田側の付城である。（鳴海城を囲む付城は北は丹下砦、東は善照寺砦、南は中島砦である。）

② 熱田より善照寺の進軍は「公記」と「甫庵」ほぼ同内容で、善照寺迄の進軍ルートは定説である。浜手の道が潮の加減で通行出来ないので、かみ道（公記）を懸けた。「甫庵」では笠寺の東を経たとある。笠寺は現在もある地名である。「かみ道」は不明であるが、浜手の東側の道で、「甫庵」記述と同じ道であろう。

（3）善照寺での戦闘態勢

（A）公記

信長，善照寺御出を具申し、佐々隼人正、千秋四郎二首、人数三百計りにて、義元へ向つて、足軽に罷り出で候へば、瞳とかゝり来て、槍下にて千秋四郎、佐々隼人正を初めとして、五十騎計り討死に候。

前田又左衛門、毛利河内、毛利十郎、木下雅楽助、中川金右衛門、佐久間弥太郎、森小助、安食弥太郎、魚住隼人、
右の衆、手々に頸を取り持ち前られ候。

（B）甫庵

佐々隼人正・千秋四郎ハ御紋ノ旗ヲ待ウケ、見ルトヒトシク義元カ先陣ノ勢山際ニ引ヘタルニ、面モ振ラス懸入テ、北ヨリ南、西ヨリ東懸破懸通切ツ切ラレツ散々ニ戦ケルカ、遂に二人ナカラ討レケレハ、是ヲ始トシテ岩室長門守究竟ノ者トモ枕ヲナラヘテ討レヌ、・・・・・

（C）三河

（記述なし）

① 信長は熱田で戦闘態勢を整え、善正寺砦へ進軍し、今川軍へ攻撃を仕掛けた。第一回目の戦闘が、鷲津・丸根両砦であるならば、ここでの攻撃は第２回目の戦闘である。

② 佐々隼人正等の攻撃隊は、「公記」によると、三百人ばかりでの攻撃であり、これは物見での衝突をこえており、本隊同士の前哨戦ととらえる必要がある。

③ 戦闘の場所は桶狭間の西側入り口、北側の山のすそ野（山際）あたりと考える。即ち中島砦の南又は東あたり。

④ この前哨戦（第２回目の戦闘）においても信長は敗退した。
前田又左衛門等の一部で勝った部分も有るが、信長軍は敗北、義元は喜んで、謡いをうたっている。（前田等の報告は次の進軍地中島で受けている）

⑤ 信長が善照寺に進軍したことは、義元は物見の報告や、鳴海城からの報告で当然認知していた。

⑥ 一方信長も義元本陣の位置については、相当程度認知していたと考えれられる。

⑦ 信長は二連敗（鷲津・丸根両砦の敗戦は想定していたであろうが）後、どこを本陣とし、どこを主戦場として戦うかを決断の時になった。

（4） 善照寺より中島

（A） 公記

信長御覧じて、中島へ御移り候はんと候つるを、脇は深田の足入れ、一騎打の道なり。無勢の様体、敵方よりさだかに相見え候。勿体なき由、家老の衆、御馬の轡の引手に取り付き候て、声々に申され候へども、ふり切つて中島へ御移り候。

（B） 甫庵

角テ信長卿ハ中嶋へ移ラセ給ントシ給フニ・・・・・・・・・・・・

（C） 三河

（記述なし）

① 信長は主戦場を桶狭間と決め、自らが陣頭指揮することをきめた。信長の本陣を善照寺にして、戦うか、熱田に引き、態勢をたてるかの方法もあったかと考えるが、この方法はとらなかった。

② 熱田に退いては、義元はその日は信長を攻めずに、翌日以降の攻撃になったと考えられる。（当日、義元は大高城に入城予定説）

③中島の地は、善照寺より、低く、桶狭間の入り口で、平坦地であり、義元軍（桶狭間の南側の丘）より、信長の動きが丸見えとなり、信長からは義元軍のその後の展開が見えにくい。

④ 中島への進軍は、中島に本陣を布いての戦いではなく、直ぐに中島より桶狭間の義元軍との決戦を意味している。

（５）中島より義元本陣への進撃

（Ａ）公記

山際まで御人数寄せられ候ところ、俄に急雨、石氷を投げ打つ様に、敵の輔に打ち付くる。味方は後ろの方に降りかかる。沓懸の到下の松の本に、二かい三かゐの楠の木、雨に東へ降り倒る丶。余りの事に、熱田大明神の神軍かと申し候なり。空晴る々を御覧じ、信長槍をおつ取つて、大音声を上げて、すは、か丶れか丶れと仰せられ、黒煙立て々懸かる見て、水まくるが如く、後ろへくはつと崩れたり。弓、槍、鉄炮、のぼり、さし物を乱すに異ならず、今川義元の塗輿も捨て、くづれ逃れけり。

天文廿一年壬子五月一九日、（永禄三年の誤り）

旗本は是なり。是へ懸かれ御下知あり。未の剋、東へ向つてか丶り給。初めは三百騎計り真丸になつて義元囲み退きけるが、二、三度、四、五度、帰し合わせ帰し合わせ、次第次第に無人になつて、後ろには五十騎計りになりたるなり。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

毛利新介、義元を伐り臥せ、頸をとる。・・・・・・・・・・・・・・・・・

もと御出の道を御帰陣候なり。

（Ｂ）甫庵

信長卿スハ首途ハヨキソ敵勢ノ後ノ山ニ至テ推マハスヘシ。去程ナラハ山際マテハ旗ヲマキ忍ヒヨリ、義元カ本陣ヘカ丶レト下知シ給ヒケル、梁田出羽守進出テ・・・・・・。是ハ後陣ヘカ々リ合フ間、必大将ヲ討事モ候ハン、・・・・・・・・、折節黒雲頓ニ村立来テ大雨頓ニ熱田ノ方ヨリフリ来リ石氷ヲ投クルコトクニ敵勢ヘ降カ々リ霧海ヲタ々ヘテ暗カリケレハ、殊ニ寄ル味方ヘ敵陣ニ近クヲモ覚束ナキ程ナレハ、敵は曽テシラザリケルモ理ナリ、彼カ陣取シ上ナル山ニテ旗ヲ張せ各ヲリ立テカ丶レト下知給ヘハ、・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

尓シ処ニ毛利新介ト名乗出テ戦ケルカ、其マ々ツキフせ遂ニ頸ヲ給テソ出タリケル。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・同日申刻ニ清洲ヘ帰城シ給ヒケルニ、・・・・・・

（C）三河

（下）ニ有敵ヲ嵩より見下シテ見レバ、太勢ヲモ小勢に見物にて候。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・徒者ハ早五人三人ゾ、山えアガルヲ見て、我先にト退ク。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

義元ハ、其ヲバ知り給ズシテ、弁当をツカワせ給ひて、ユクユクトシテ御給ひシ処に、車軸ノ雨ガ降り懸ル処に、永禄三年庚申五月一九日に、信長三千計にて切て懸ラせ給えば、我モ我モト敗陣シケレバ、義元ヲバ、毛利新助方ガ、場モ去ラサせズシテ打取。

①「公記」によると山際に兵を寄せた。「甫庵」によっても山際まで忍び寄って行ったとあり。信長本隊は善照寺を進発し中島から山際へ兵を移動させたとある。

②「三河」では、信長軍の徒者が山を上る事を記述している。

③いずれもこの山は桶狭間の北側の山並（高い所で標高六～七〇メートル）のことである。その山並みが始まる桶狭間の西側の入り口の山際をさしている。

④この地点へは戦闘無く、やすやす移動出来た事が、先ず、今後の両軍の勝敗の大きな節目となる。「甫庵」では旗を巻き忍んで行った事になっている。

⑤更に「甫庵」では、後ろの山から攻撃をかけるとの言い回しがある。
「後の山が曖昧である。」

⑥ここにおいて、後の作家や研究者の間において、義元本陣攻撃までの進軍ルートについて、迂回説（北側山並みの更に北側の鎌倉往環（中世東海道）の北側筋より迂回）、そして最近の有力説として、正面突破説やその他説が開陳されている。
注、迂回説のルートは、添付資料「日本戦史　桶狭間戦役　桶狭間戦図　第三号」を参照。

⑦その後、激しい風雨が西より東に向け激しく襲った。これは風向きからして信長軍が有利である。これは各史料とも事実として捉えている。

⑧更なる信長の進軍は「公記」によると、風雨がおさまって空晴れてから攻撃を開始した。

⑨「甫庵」では、「彼か陣取シ上ナル山ニテ旗ヲ張せ各ヲリ立テカ々レト・・・・」とあり、一旦義元本陣の近くの、北側の山に集結してから、攻撃したとも読みとられる。
これから、後の作家や研究者より太子ヵ根（義元本陣の北側の山）に集結してからの攻撃説が、生まれたものと考える。現在も有力説の一つである。

⑩次に義元本陣が具体的にどこであったかの問題である。
「公記」ではおけはざま山で、牛の刻に、戌亥の方角に向かって陣を布いたとある。（本レポート4頁　（4）永禄三年五月一九日義元本隊の進軍）

⑪「甫庵」および「三河」では、具体的な地名の記述がない。

⑫右記本レポート基本三史料以外では、武徳編年集成では「桶狭間田楽が窪」、甲陽軍艦では「でんがくぼ」、武功夜話では「田楽はざま」と記述されている。
従来の通説では、これらから「田楽狭間」が唱えられていた。場所は、南側丘陵地帯にある史跡桶狭間古戦場跡と称されている豊明市南館十一ではなく、狭間（谷合）で、更に西側、狭間の東側出口あたり（現藤田学園の南側当たりか）

注、添付「日本戦史　桶狭間戦役　桶狭間戦図　第三号」及び「レポーター（梅谷）撮影現地写真」を参照。

⑬このように本陣の位置がはっきりしない理由は、当時このあたりの地名が、固有名詞として、又行政上の地名として、きっちりしていなかったことが上げられる。

⑭合戦時にどこまで、きっちりとした名前が確定していたのか、その後に名付けられた地区名なのかが問題である。
鳴海、大高の地名はあったが、桶狭間自体も固有名詞であったのか普通名詞（桶の様な狭間地帯）であったのかの問題がある。

⑮この地区の名称についての研究は、名古屋市教育委員会の報告「桶狭間古戦場調査報告」（昭和四十一年）で論述されいる。

⑯現在の有力説は、谷合の田楽狭間を否定する。本陣を谷合の低い場所におくことは、当時の布陣の原則に反する事であり得ないとしている。
それでは、具体的にどの地点かと問われれば、難しく、、豊明市の史跡桶狭間古戦場と名古屋市緑区の古戦場公園の間位かとの説が現在は有力である。

⑰ここで信長の善照寺から進撃して義元討ち取り迄の進軍ルートの主要な説を

あげることにする。

ｉ：善照寺―鎌倉往環（中世東海道）の北側の筋―鎌倉往環を横切る―北側の山（太子ヵ根（大将ヵ根））―義元本陣

注、添付「日本戦史　桶狭間役　桶狭間戦図」参照

本陣位置を分けると

イ、田楽狭間

ロ、豊明市の史跡桶狭間古戦場跡あたり

本説は従来の通説で、右記イ説の研究書としては陸軍参謀本部編集の「日本戦史」桶狭間役が代表的である。

右記ロ説も江戸時代から通説で、参勤交代の大名から今日の一般観光客もこの説を知らされてきた。

いずれにしても迂回奇襲説で、義経の「一の谷の合戦」と並び称せられて日本人受けのする説であると言われている。

ⅱ：新説

イ、善照寺―中島砦―義元軍の正面（桶狭間の東入り口）―義元本陣（桶狭間山）

本説は、藤本正行によって発表され、今日有力説となっている。

信長公記を信頼する史料として研究し、迂回奇襲説は、距離的に（所用時間）そして北側山越えには無理があり、更に義元軍に発見される可能性が大であるとして、これを全面否定して、新説をうち立てた。

（信長の戦国軍事学―一九九三年）

ロ、善照寺―中島―山沿いの狭間筋か北側の尾根―太子ヵ根―義元本陣（おけはざま山）

（静岡県史　通史編２　中世　有光有学）

正面攻撃説をもとに修正された説と言われる。

三、信長の勝因と義元の敗因

信長公記。信長記、三河物語等の史料の右記分析を基にし、研究者の意見を参考にし、更に去る八月一三日の自らの桶狭間地域の視察をも勘案して、結論を述べる。

（１）桶狭間地域の視察

①桶狭間の北側の山並の東側の入り口に位置し、桶狭間で最も高い二村山（標高七十二にメートル）から桶狭間の谷合を見下ろした。

桶狭間の谷合は、史料や文献のイメージより平坦で、この地域が濃尾平野の一画であることを感じさせられた。
南側の山並は、山並みと言うよりなだらかな丘陵である。（宅地造成でいくら削られているかもしれない）
前面の下方が田楽狭間と称せられている所であるが、藤田学園がさえぎっていて、全貌は見えなかった。
北側の沓掛城跡は肉眼では見えないが、その方向は途中は全く平坦な平野であった。

② 桶狭間の西の善照寺砦跡より視察したが、桶狭間の南側は、やはりなだらかな丘陵のイメージであった。

③中島砦跡当たりから桶狭間入り口は、前方の建物の為、しかと観察できなかた。谷合までは平坦を感じさせられた。

④豊明市南館の史跡桶狭間古戦場は、付近で一番高い所ではなく、平地より坂を五分位登った位置である。

⑤桶狭間古戦場公園（名古屋市緑区）は豊明市の古戦場より南西、直線距離にして五〇〇メートル位である。

注、添付「レポーター（梅谷）撮影現地写真」を参照

（2）結論

①信長の進軍ルート

清洲城―熱田神宮―善照寺砦―中島―桶狭間西側入口北側の山際―北側の山並（山裾を東へ）―おけはざま山の向かいの北側の地点―（谷合を横切る）義元本陣の西側の地点―（西側から東へ）義元本陣

注、添付「書き込み地図」（1）・（2）を参照

善照寺より鎌倉往環（中世東海道）あたりからの迂回ルート説はとらない。
それは信長公記、信長記、もはっきり中島へ行くことを記述しているからである。三河物語も、徒者（信長軍）が山（北側の山）へ上がるの見ている。
三史料とも迂回したとは記述していない。
迂回説は、信長記の「後ロノ山ニ至テ推マハスヘシ」からの想定と、多が寡に勝つためには、迂回奇襲との既成概念から生じたものかと考えられる。

中島から山際まで来たところで、暴風雨に遭遇し、それが止んでから一挙に攻撃にでた。それは攻撃までに義元の本陣近くまで進軍していたことになる。

桶狭間の谷合中央は深田であり、暴風雨で戦闘態勢が崩れていたといえ、相当数の義元軍が布陣しており、急な進軍はできない。

そこで田圃がないもしくは少ない北側山際ルート（一部の徒は山の斜面）を走り、おけはざまの山の向かいの北側の地点から、義元軍の長い陣の横を突き破り、義元本陣の西側に到達した。

そして午後二時ごろ、東へ向かって、義元本陣を集中攻撃し、義元を討ち取ったと考える。

②義元の本陣位置

史料から、当日の義元本陣と討たれた場所をきっちり特定する事は難しいが、信長公記の言う「おけはざま山」をやはり南側の丘陵の一画と見ることが妥当と考える。

そうすると、さらに地点を限定すれば、豊明市南館の史跡桶狭間古戦場と名古屋市緑区の古戦場公園当たりと見て良いと考える。

③信長の勝因

善照寺より自ら指揮して、打ち出たこと。山際を駈けた事。義元軍の脇を攻めたこと。そして最も大きな勝因は、暴雨風で、義元軍の態勢が崩れていたことである。そして西より東へ吹き付ける風雨を味方にしたことである。

信長は、善照寺を進発して、当初より義元本陣を攻めて、義元討ち取り迄を考えていたかどうかである。

更にさかのぼれば、信長は大軍の義元遠征軍を壊滅させるような戦いをしようと思っていたかである。

局地戦で勝つか引き分けを何戦か行い、せめ倦む義元軍が、武田、北条との三国同盟があろうが、義元が本国駿河を気がかりになり、戻ることを期待していたと考える。

信長はしぶとく抵抗する中で、武田や北条と手を結ぶことも考えられる。

籠城だけでの戦いでは、戦後において武将としての力量を問われ、近隣大名との戦略上、外交上に支障を来し、又家来の統率を損なう恐れがある。

信長公記で、善照寺から中島へ進軍するときに「・・・・・・懸らばひけ、しりぞかば引き付くべし。是非に於いて稠り倒し、追い崩すべき事、案の内なり。」演説している。

信長の戦術は、古人曰く「押さば押せ、退かば退け」ではなく、敵が強くてかかってくれば退け。そして味方が強く敵がしり退けば、ねり倒して、崩せと。

これは、相手が強いときは退けと言うことは、全滅を避けるために退却を言っている。

ここで負ければ、退却して、次なる陣を布くか、清洲城で戦うかを考えていたと思われる。

そして相手が弱ければ、徹底的に攻めるべしと。

実際には、信長軍は強襲方法が功を奏し、しりぞく相手を敵陣深く入り込み、ねじり、おし崩したのである。

勝機をつかんで、時間を置かず一挙に攻め込み、陣頭指揮して大軍の将を討ち取ることは、戦術もあるが、信長の戦の駆け引きの天分を認められずを得ない。

④ 義元の敗因

義元が中島、善照時の戌亥の方角を向いての布陣は、妥当である
しかしながら、中島と桶狭間入り口平坦地及び谷合に約二キロメートル以上にわたって布陣することは、布陣がT字型に長く、どこに主戦の先陣部隊を置くかそして第二陣以下の陣をどこに布陣するのかが難しい。

義元は、合戦の為の陣をおけはざま山に布いた。大高城へ進軍途中での休憩であるため、陣を布かなかったとの説もあるが、午前中に桶狭間入口当たり（中島あたり）で前哨戦（信長軍で三〇〇人規模）の戦闘があった中で、義元軍が布陣しないわけがない。信長公記の言うように午の刻に戌亥の方角に

向かって布陣したのである。

しかしこの陣形が確かなものであったかが問題である
布陣の詳細は、記録には、見当らない。しかし、史料からの推定と信長勝利の事実から、左記のような重要問題がある。

義元軍の兵員が、大きく分散してしまっているなかで、桶狭間の北側の山並みの兵員が過小であったといえる。
特に桶狭間入口の北側山部分は、絶対制圧しておき、信長自身が進撃してきたときに、重層の陣で対抗するべきであった。

これは、推定であるが、信長軍の大高城方面への責め口も考慮して、又南側のなだらかな丘陵の北斜面を絶対確保の為、そこにも兵員を重層したのではないかと思われる。

鎌倉往環（中世東海道）も兵員なしとはいかない。

大高城に、家康の部隊が駐留し、兵員が、割かれてしまっている。
信長は、朝、鷲津・丸根を攻撃した部隊が前線にいると思っている。
「あの武者、宵に兵粮つかひて夜もすがら来り、大高へ兵粮を入れ、鷲津・丸根にて砕き、・・・・・・」と信長公記に記述がある。

結果論故言えることかもしれないが、北側の山の制圧を重んじるべきであった。

もちろん暴風雨は、信長が有利に、義元不利に働いたことが大きな要因である事は間違いない。

［終わりに］

勝敗の要因の中に、信長軍の馬廻り、旗本のいわゆる信長親衛隊が義元のそれより強かったと言われる向きもある。これを言うには、義元軍の親衛隊についても言及する必要があり、史料では見いだせず、信長親衛隊の強さも一因であったかもしれないが、ここでは勝敗の一因に上げなかった。

史料については、太田牛一の「信長公記」は時間、場所、方向が具体的であり、布陣につ

いても記述がある。表現は簡潔すぎて、理解が難しい面はあるが、信頼性は高い。

小瀬補庵の「信長記」は、「信長公記」を下敷きに、甫庵の調査に基づき、加筆・編纂された伝記と言われるが、場所、方向、布陣について具体的な記述が無い。内容が物語的で、後世の大衆には受けは良いかもしれないが、事実関係についての信頼性は「信長公記」に及ばない。

「三河物語」は大久保忠教の作である。今川から見た桶狭間の戦いについての一貫した史料がない中で、この作品は大事な史料である。但し、記載内容が家康に片寄っており、全体の内容が少ない。

その外「織田軍記」は甫庵の信長記系であるし、松平記は、家康の伝記系である。

その他多くの史料は江戸時代以降にに創作された作品として、今日では史料価値を疑問視する研究者が多い。

桶狭間の戦いについて論ずるに当たっては、義元の進軍の目的(京都進軍と天下制覇説、尾張制覇説等)や、信長の戦闘方法、その中での桶狭間合戦の特徴について言及しなければならないが、今回のレポートでは右記に止め、表題にそった内容とした。

以上

〔参考資料〕・・・・・添付別紙

一、史料・文献一覧表

二、書き込み地図

（1）週間ビジュアル日本の合戦（講談社）

日本戦史　桶狭間役　桶狭間戦図　第三号に書き込み

（2）国土地理院の地図に書き込み

三、現地写真（梅谷撮影）

（1） 引 用 史 料

	書　　名	著　者	成立		備　　考
1	信長公記	太田牛一			桑田忠親校注、新人物往来社発行、1997
2	信長記	小瀬甫庵			豊明市史「史料補二　桶狭間の戦い」2002、名古屋市蓬左文庫
3	信長記	小瀬甫庵			神郡　周校忠、現代思潮社、1981、寛永元年板本
4	三河物語	大久保忠教	江戸		豊明市史「史料補二　桶狭間の戦い」2002、日本思想大系22
					岩波書店
5	松平記				豊明市史「史料補二　桶狭間の戦い」2002、三河文献集成、
					中世編　復刻　刊行会
6	織田軍記	遠山春信	江戸		通俗日本全史第七巻、早稲田大学　1925
7	武徳編年集成	木村高敦	江戸		豊明市史「史料補二　桶狭間の戦い」2002、刈谷市村上文庫、
					安政2年版
8	武功夜話一	吉田孫四郎	1658		吉田蒼生雄訳注　新人物往来社、1987
9	甲陽軍艦	小幡勘兵衛	江戸初期		吉田豊編訳、徳間書店、1971、武田流軍学全書を底本

（2） 参 考 文 献

	書　　名	著　者	発行年	発行	備　　考
1	豊明市史「史料補二　桶狭間の戦い	豊明市	2002	豊明市	
2	愛知県史「資料編　織豊」	愛知県		愛知県	
3	静岡県史「通史2　中世」	静岡県		静岡県	
4	桶狭間古戦場調査報告	名古屋市教育委員会	1966	名古屋市	
5	織田信長合戦全記録	谷口克広	2002	中央公論新社	
6	信長の戦争	藤本正行	2003	講談社	原本　信長の戦国軍事学　1993
7	新編　日本合戦全集4　戦国乱世編	桑田忠親	1990	秋田書店	
8	合戦の日本地図	武光　誠		文藝春秋	
9	日本戦史　桶狭間役	参謀本部	明治3	村田書店	豊明市史「史料補二　桶狭間の戦い」2002、
10	大日本戦史ニ	高柳光壽	1938	三教書院	監修　井上一次・辻　善之助
11	日本の合戦1　織田信長と桶狭間の戦い	講談社編纂局		講談社	監修　大和田哲男
12	国盗り物語　後編　織田信長	司馬遼太郎	1970	新潮社	サンデー毎日、1967
13	武将列伝上「織田信長」	海音寺j潮五郎	1970	朝日新聞社	海音寺潮五郎全集16巻
14	戦国武家事典	稲垣史生	1965	青蛙房	
15	もう一つの桶狭間	井上　力	2000	講談社出版	

２００５年８月１３日撮影（梅）

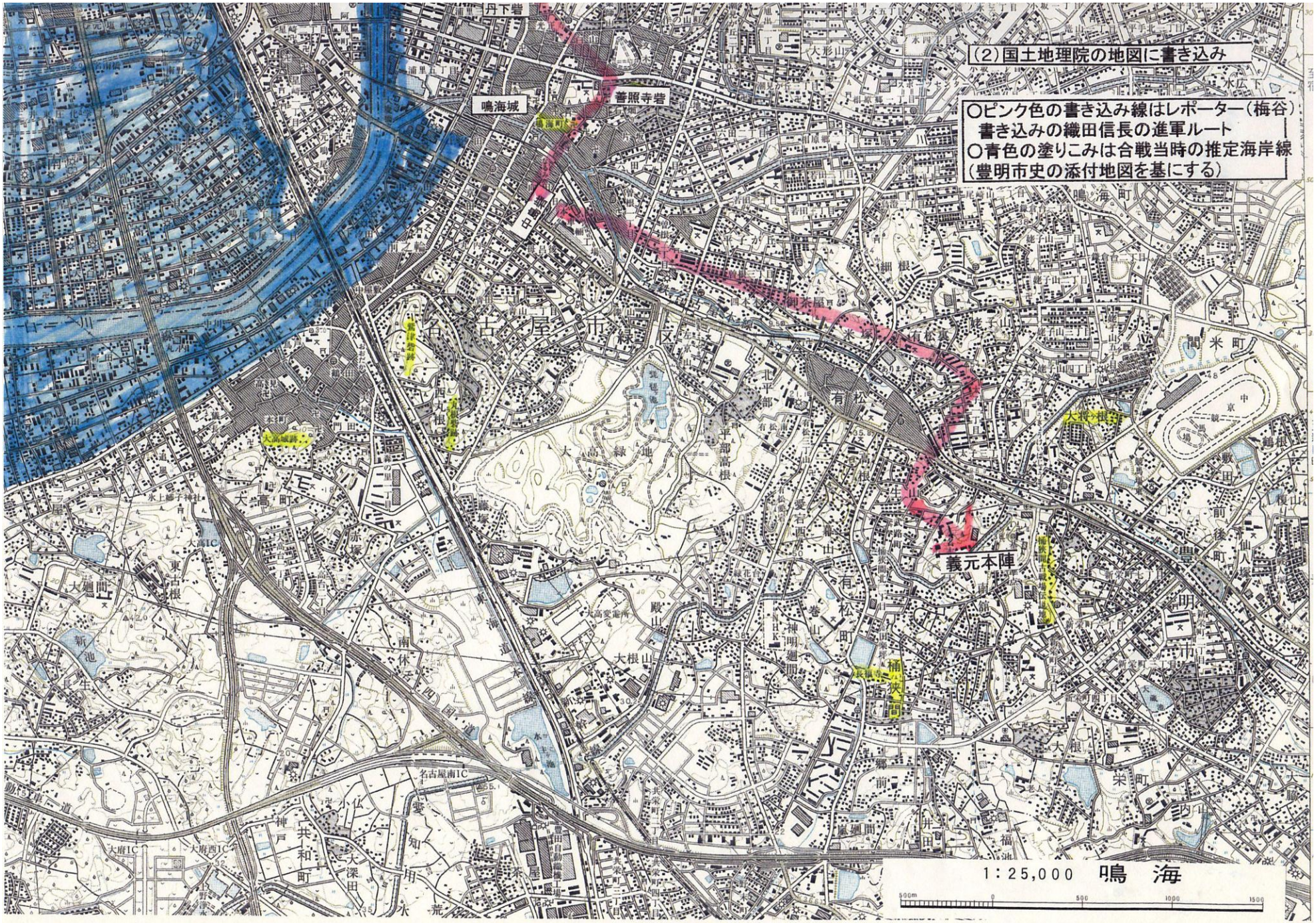
A　善照寺砦跡より桶狭間方向

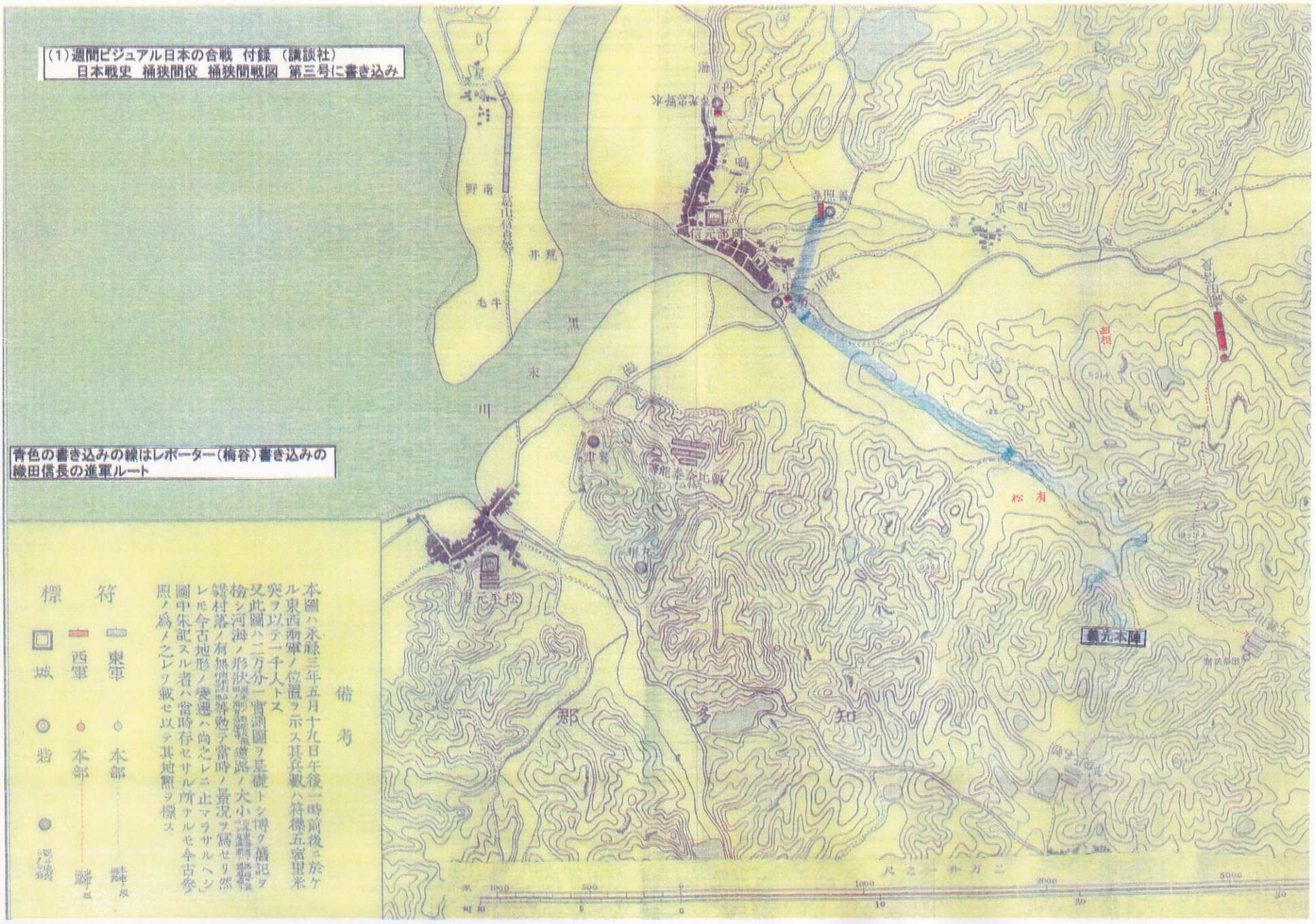
B　名古屋市緑区

C　豊明市南館

三村台（豊明市）よりの眺望
（２００５年８月１３日撮影　梅）

・三村台（山）は北側山並みの東の端で付近で一番高い山（標高７２M）
・上段左より東より西へ、下段はその続き
・上段左の建物は藤田衛星大学、その向こうが田楽狭間


(2)国土地理院の地図に書き込み
○ピンク色の書き込み線はレポーター(梅谷)書き込みの織田信長の進軍ルート
○青色の塗りこみは合戦当時の推定海岸線(豊明市史の添付地図を基にする)
丹下砦
鳴海城
善照寺砦
中島砦
義元本陣
桶狭間
1:25,000 鳴 海


(1)週間ビジュアル日本の合戦 付録 (講談社)
日本戦史 桶狭間役 桶狭間戦図 第三号に書き込み
青色の書き込みの線はレポーター(梅谷)書き込みの
織田信長の進軍ルート
備考
本圖ハ永祿三年五月十九日午後一時前後ニ於ケル東西兩軍ノ位置ヲ示ス其兵數ハ符標五密里米突ヲ以テ一千人トス
又此圖ハ二万分一實測圖ヲ基礎トシ博ク舊記ヲ檢シ河海ノ形狀
鑵村落ノ有無
レモ今古地形ノ變遷ハ尚之レニ止マラサルヘシ
圖中朱記スル者ハ當時存セサル所ナルモ今古參照ノ爲メ之レヲ載セ以テ其地點ヲ標ス
符標
東軍
西軍
城
本部
本部
砦
二万分一之尺
義元本陣
松有
那
多
知